

厚岸湖・別寒辺牛湿原ラムサール条約登録湿地

厚岸水鳥観察館運営計画

平成18年3月

環境政策課 水鳥観察館

目 次

1. 厚岸湖・別寒辺牛湿原が登録された背景 -----	2
2. 厚岸水鳥観察館運営計画の必要性 -----	5
3. 厚岸湖・別寒辺牛湿原の解明及び調査研究 -----	6
4. 自然環境保全及びその活用 -----	8
5. 水鳥観察館のめざすべき機能 -----	10

1. 厚岸湖・別寒辺牛湿原が登録された背景

(1) 植生などから見た価値

- ① 別寒辺牛湿原は、河川流域に広がる大規模な湿原であり、釧路湿原に次ぐ国内2位の面積を有する貴重な湿原である。
- ② 厚岸湖に注ぐ別寒辺牛川の本流及び支流に沿った丘陵・山地間の低平地には、大部分がヨシあるいは大型スゲ類を主体とする広大な湿原が発達している。又、別寒辺牛川とトライベツ川の合流点を頂点として最大幅約 0.4km、最長約 1.5km の逆三角形形状の湿原中に約 100ha に及ぶ高層湿原が存在する。その高層湿原の学術的価値については、厚岸町教育委員会「別寒辺牛湿原の植生に関する調査報告書 I」(1998) は次のように記述している。

別寒辺牛湿原の植生は最近までほとんど人為の影響を受けずに保存されてきたが、戦後の泥地開発事業の進展とともに北海道の低地湿原の多くが農用地等に転換された中で、これは大稀なケースであり、優れた^{注1}原始景観を有する学術的価値の高い湿原として貴重である。また、現存植生図に示されているように、高層湿原とそれを取り巻く低層湿原及びハンノキ林を含め湿原植物社会全体が一つの景観単位を形作り、湿原生態系の構造と機能を維持している点も貴重な湿原といえる。

したがって、湿原生態系の保全のためには蛇行する二つの自然河川トライベツ川と別寒辺牛川流域及び丘陵を含めた集水域全体を広く保全することが必要である。

(2) 水鳥などの生態系から見た価値

- ① 厚岸湖は厚岸湾に連なる周囲 26km の汽水湖で、潮が引くと干潟が現れ、水鳥の餌が豊富である。この環境に支えられ、別寒辺牛川河口を含む厚岸湖周辺と別寒辺牛湿原の各支流も含めた湿原部には国の天然記念物に指定されているタンチョウの営巣が、近年 40 つがい確認されている。この数は、釧路湿原、風連湖水系周辺につぐものである。タンチョウは湿原生態系の頂点の地位にあるため、自然環境のバランスを測るバロメーターにもなり得る貴重な生物である。タンチョウが多く見られるのは、広い湿原に餌が豊富にあり、別寒辺牛湿原が優れた生態系であることとの証拠である。

② 厚岸湖及び別寒辺牛川河口部は渡り鳥の越冬地や中継地として重要な地位を占めている。まずオオハクチョウについては 1,000 羽～3,000 羽が越冬し、大規模な給餌を行っていない水域としては、日本最大の越冬地である。厚岸湖を中継地として利用するものは推定 10,000 羽以上ともされ、ピーク時には 6,000 羽以上もの飛来数になる。また数万羽のカモ類もここを利用する。オオハクチョウの主食は水草の一種のアマモで、年変動はあるものの、別寒辺牛川河口から厚岸湖及び厚岸湾には日本でも数少ない広大な藻場が形成されている。アマモが形成する藻場は魚のすみかとして重要で、また、注2河川及び湖内の栄養塩類の循環にも貢献しているといわれている。

③ 平成 8 年ころから厚岸湖で越冬するオオワシ、オジロワシを調査しているが、多い年で約 350 羽にも達する。年変動が大きいものの越冬数は増加傾向にある。この現象は、羅臼周辺に集まっていたものが、スケソウダラ漁の不振により餌を求めて他の地域に分散したという説が有力だが、厚岸湖を目指してきた背景には、氷下待網漁の雑漁やエゾシカのへい死体など簡単に手に入る餌が豊富にあることが要因と考えられている。したがって、オオワシ、オジロワシの場合は、人間の生産活動等に餌を頼っている結果として、越冬地をその状況に応じて変えているためであるが、数少ない大規模な越冬地として重要な地域である。また、厚岸湖・別寒辺牛湿原周辺の自然環境のすばらしさを象徴するように、以前からオジロワシの繁殖が確認されている。

④ 魚類も湿原生態系の中で重要な役割を果たしている。川や湖に住む魚は 70 種類以上を数え、中には幻の魚といわれるイトウの繁殖も確認されており、イトウにとって道東最大の生息場所である。イトウはサケと異なり、同じ親が何年も産卵し、河川内を移動する。これは、別寒辺牛川水系は原始的自然が良く保存され、川～湖～湾と水域の連続性が保たれていることが大きな要因と言われている。

また、別寒辺牛川水系には、トゲウオ科魚類のイトヨ属 2 種（日本海型と太平洋型）とトミヨ属 3 種の合計 5 種が共存している。単一水系にトゲウオ科 5 種が共存する地域は世界的に見ても本水系とその周辺に限られている。トゲウオ科魚類は、河川魚類生態系の底辺に位置し、このトゲウオ科のみでもこれだけの多様性を持つ別寒辺牛川水系は、非常に多様な魚種を育む河川である。

※参考文献

「厚岸湖の渡り鳥たち～オオハクチョウ、オオワシ・オジロワシたちの現状～」

水鳥観察館専門員 澁谷辰生

「厚岸湖の栄養塩循環に果たすアマモの役割の数値モデルによる研究

～秋の観測についての報告」

東京大学海洋研究所 大島ゆうこ

「厚岸産トゲウオ科魚類5種の共存機構-異所的生息地との比較研究」

北海道大学大学院科学研究科 山田美穂ほか

(3) ワイズユースの面から見た価値

- ① 厚岸湖は別寒辺牛から供給される豊富な栄養素の恵みを受け、カキ、アサリ、シラウオ、カレイなどの多様な魚介類が生産される漁場である。
- ② 別寒辺牛川水系や厚岸湖は、魚類の自然産卵の場としてその環境は漁業生産活動とも密接に関連している。
- ③ 厚岸湖や別寒辺牛川は釣り場として多くの人に親しまれている。また、カヌーによる自然観察もタンチョウ営巣期には乗り入れを制限するなど、タンチョウへの悪影響を出来るだけ避けて楽しむルールが確立されている。

2. 厚岸水鳥観察館運営計画の必要性

生活水準が向上し、都市化が進む生活環境のなかで、自然と接することにより精神的なやすらぎ、心身のリフレッシュによる明日への活力、ゆとりのある心を培うことの大切さなどが見直されている。特に、水辺や身近な自然の存在が注目されはじめ、平成5年に釧路市にて開催されたラムサール条約締約国会議における釧路声明「湿原の保全とワイズユースの推進」にもあるように、世界レベルで、湿原の保全、活用方法について関心が高まってきている。

しかし一方では、余暇指向の変化に伴った、湿原などを活用したレジャー人口の増加、ニーズの多様化に伴うマナーの悪化、むやみな開発による環境破壊などの問題も出てきている。

厚岸町における湿原などの自然環境の破壊は、動植物に与える影響だけにとどまらず、基幹産業である漁業にも大きな打撃を与えることになる。別寒辺牛湿原が、開発されず原始の姿で残っていることは、生態系の維持につながり、その生態系の循環の中にある漁業生産物を守り続けていくことができた要因であり、町民の大きな財産である。

湿原の賢明な利用のためには、まず湿原を知る（調査・研究・体験・学習）ことから始め、その活動や取り組みの輪を、全道、全国、世界へと広げ、厚岸町としての地域的な特徴を踏まえて、創造性を持って取り組んでいくことが必要である。

このため「自然と人と産業の共生」をさらに図り、湿原と自然を取り巻く環境の保全、自然の有効活用のための調査、研究及びその自然の価値の普及啓発を計画的に進めるための指針として「厚岸水鳥観察館運営計画」を策定するものである。

3. 厚岸湖・別寒辺牛湿原の解明及び調査研究

(1) 調査研究資料の蓄積

① 目的の設定

「自然と人と産業の共生」を推進させる事業遂行のため、目的を設定し、資料の蓄積を行う。

- 1) 湿地と自然を取り巻く環境の保全と活用
- 2) 湿地と自然を取り巻く環境の持続可能な活用
- 3) 資料による普及啓発活動

② テーマの設定

目的達成のため收拾する資料のテーマを設定し、その蓄積を行い事業の展開に活用する。

- 1) 厚岸町の自然に関する調査研究資料
厚岸湖・別寒辺牛湿原の地質、構造、生成、役割に関すること
- 2) 動植物に関する調査研究資料
厚岸湖・別寒辺牛湿原の水鳥等の動植物に関すること
- 3) 自然と産業の関わりに関する調査研究資料
厚岸湖・別寒辺牛湿原と地域産業との関わり
- 4) 湿地の賢明な利用に関する研究資料
厚岸湖・別寒辺牛湿原の持続可能性のある活用方法研究

③ 各種調査機関の受け入れによる調査研究事業の展開

- 1) 対象団体
 - a. 大学等の研究機関
 - b. 民間の自然関係調査機関
 - c. その他自主研究者（海外を含む）
- 2) 各種調査研究機関との連携
各大学等の研究機関並びに各種調査研究機関との連携

④ 誘致条件の整備

- 1) 補助事業
各種調査研究機関及びその他自主研究者等の受け入れを行う厚岸湖・別寒辺牛湿原に関する調査研究事業については、「厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励

補助金」により行うものとする。

2) 交付条件

「厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金」交付要綱のとおり

3) 施設使用協力

調査研究期間中、調査研究に必要とされる施設及び設備等について使用協力を
を行う。

4) 各種補助金の活用

北海道及び民間団体が実施している補助金の斡旋等を行う。

(2) 町が行う調査研究事業

① 水鳥観察館職員による独自の調査研究

- a. カヌーコース内及び観察館周辺タンチョウの行動解明
- b. カヌー利用者へのマナー等啓発普及資料蓄積
- c. 水鳥等動植物の生息分布状況等の調査
- d. 姉妹湿地及びラムサール条約締約国の資料収集
- e. 国内ラムサール登録湿地に関する資料の収集
- f. その他厚岸湖・別寒辺牛湿原に関すること

4. 自然環境保全及びその活用

(1) ひとづくり

① 調査研究者等の育成

- 1) 地域住民の意識づくり
 - a. 学習会等の開催等により地域住民への意識の浸透、啓発
- 2) 活動内容
 - a. 湿地等に関する地域レベルでの自主的な調査研究
 - b. 各種調査研究機関・団体、自然愛好家グループの受け入れによる調査研究
 - c. 専門的人材の育成

② 別寒辺牛湿原ファンクラブ（仮称）の設立

- 1) 地域住民の参加
 - a. 自然を学ぶ、その活用考え、話し合うことによる自由な発想を誘発
 - b. 人から人へのつながりによる参加を呼びかけ
- 2) 活動内容
 - a. 自然環境関連の催しの企画、開催
 - b. 湿原を活用したカヌー利用等によるイベント、湖・湿原等清掃事業の企画、実施

③ 蓄積された資料の活用による教育分野へのフィードバック

- 1) 自然環境保全意識の啓発
自然環境と地域産業との関わりを知ることにより、人と自然の共存等についての知識を得、次世代の対応についての意識の活発化
- 2) 学術的分野への取組み
地域の自然環境の専門的知識習得
- 3) 環境教育、普及啓発の実施
自然とふれあうこにより、環境を大切する心・活用への発想力の育成

(2) 自然環境の保全

① 自然環境保全啓発活動

- 1) 蓄積資料の活用による啓発活動
 - a. 自然環境保全に関するマニュアル等の作成
 - b. 自然及び動植物に関する情報紙の発行

- c. 町民等を対象とした学習会等の開催
- d. カヌー利用規制の周知等

(3) 地域の活性化

① 中核施設としての確立

- 1) 湿地に関する調査、研究、研修の拠点
調査研究団体及び個人研究者の誘致し、研究施設の核としての位置づけ
- 2) 水鳥等動植物の観察の拠点
水鳥観察館及びカヌーの活用等により、動植物の観察の拠点としての確立
- 3) カヌーによる川下りの拠点
自然と人の共生のマナーを基本とする川下りの地の定着化

② 地域間交流の推進による展開

- 1) 国際交流
 - a. 海外研究者の受け入れ
 - b. 釧路国際ウエットランドセンターとの連携
 - c. 姉妹湿地交流団の派遣、受け入れ
 - d. ラムサール条約締約国との情報交換
- 2) 国内交流
 - a. 各種調査研究機関との交流
 - b. カヌーによる交流人口の増加
 - c. ラムサール条約登録湿地関係市町村との交流

(4) 地域の基幹産業への活用

① 漁業振興対策

- 1) 自然環境の調査研究による漁場環境の解明等への情報提供
- 2) 環境に適した地域特産物の養殖技術研究への情報提供
- 3) 漁場環境保全のための普及啓発活動への情報発信

② 農業振興対策

- 1) 農地周辺環境保全のための普及啓発活動への情報発信

5. 水鳥観察館のめざすべき機能

(1) ラムサール条約登録湿地「厚岸湖・別寒辺牛湿原」の管理機能

① 湿原の拠点施設としての機能

- 1) 展示、映像、情報紙等による湿地に関する情報提供
- 2) 湿地の観察指導
- 3) カヌー利用に関するマナー等の講習
- 4) 鳥獣保護区（特別保護地区等）に関する情報提供
- 5) 水鳥観察館情報の発信

② 湿地、水鳥に関する調査研究としての機能

- 1) 自然に関する各種調査研究機関の活動拠点
- 2) 調査研究資料データの作成、保存
- 3) 傷病鳥獣収容の協力

③ 自然観察の拠点としての機能

- 1) 自然観察、環境教育の実施
- 2) 自然愛好家グループ及び個人の受け入れ

④ 湿地を活用した国際交流、地域間交流の場としての機能

- 1) 国際会議等開催における実地研修の場
- 2) 湿地研修団等の研修の場
- 3) カヌー等による自然を活用したイベント等、体験交流の場
- 4) 各種自然環境調査団体等の受け入れによる調査研究の場

⑤ 自然環境保全活動の情報提供拠点としての機能

- 1) 自然環境に関するデータベースの作成
- 2) 海事記念館、情報館等他の施設の連携による情報提供

注 1

①道東地域の湿原は、約 5,000～6,000 年前から現在に至るまで成長し続けている。別寒辺牛湿原においても、形成される過程がそのまま現在まで保存され、その景観を保っている数少ない湿原である。

②別寒辺牛川中流域、別寒辺牛川本流とトライベツ川の合流部北部に広がる約 100ha がミズゴケに覆われ、本来高山植物であるイソツツジやガンコウランなどが生育する高層湿原になっている。この高層湿原は、低層・中間・高層と形成過程が典型的に展開される点で、学術的にも貴重である。

注 2

アマモ等の水草が、オオハクチョウなどのカモ類に食べられることにより、その糞は水中の小動物や微生物の格好の餌になる。この点で、湖内の物質循環の一端を担っていると考えられる。